

国際シンポジウム2 特別講演

伝統文化の継承 —心游舎の活動を通して—

彬子女王

ご紹介いただきましてありがとうございます。お昼休みのあとで、皆様、きっとおなかいっぱいになられて、お眠いことだと思いますが、なるべく皆様がお休みにならないようなお話をしたいと思っておりますので、おつきあいいただけたらと存じます。

大英博物館の展示

2006年にリニューアルオープンした大英博物館の三菱商事日本ギャラリーは、Japan from prehistory to the present と銘打った、日本の歴史を先史時代から現代まで概観する常設展を行っています。考古学遺物から彫刻、絵画、版画、版本、陶磁器、金工、甲冑や刀剣など、多種多様な作品を用いて、日本の歴史を縄文時代から順に追えるような構成になっており、縄文土器や埴輪から、高倉健のポスター、漫画までが一堂に会したこのギャラリーは、毎日、多くの人々の関心を集めております。

ここで注目していただきたいのが、2011年の冬に展示されていた、こちらの漫画です。ご存じの方はいらっしゃいますでしょうか。「聖☆おにいさん」という漫画なのですけれども、このようにキャプションがついて展示されておりました。これは、簡単にご説明しますと、イエスとブッダが天上界からバカンスを取って、立川の安アパートで同居生活をしているというストーリーの漫画です。

私はすごく好きな漫画なのですが、この漫画はウイットに富んでおりまして、宗教というテーマを分かりやすく伝えている漫画だと思っております。この時は、大英博物館の学芸員が大好きな漫画ということで、展示をしたのですが、これは、ただ、漫画というものを、ただのポピュラーカルチャーとして捉えていたわけではありません。ちょうどこの同時期に、東アジアの宗教の特別展が行われていたのにあわせて展示がされました。東アジアの仏教の展示と、今、現代の日本で、仏教というものがどのように捉えられているかというのを示す

一例として、この「聖☆おにいさん」の漫画が使われていたということです。

私は、6年間、英国のほうで留学生活を送りましたが、海外に長く生活していきまして、感じたことがいくつかあります。それは日本のイメージが二極化しているなということです。いわゆる江戸時代の文化、侍とかマウントフジ、腹切り、芸者というような、ちょっと前時代的な偏った日本イメージと、アニメや漫画に代表されるような、いわゆるサブカルチャーの部分が、完全に2つに分かれて伝えられているような気がするのですが、この間が全くないのですね。

大英博物館の展示は、この大きな2つのイメージを取り入れて、それを古代から現代までの日本の通史の中に、きちんと当てはめて紹介しようという試みです。版本を今、出しておりますけれども、日本の歴史の流れの中に版本があり、写真集があり、漫画があるということです。

写真の技術がなかった時代は、版画、版本でたくさんの人に伝える。写真が撮れるようになったらそれを印刷する。漫画のような形で、また、今、新しい時代でこういったことを伝えているという、日本の出版文化という一つの流れの中に漫画をきちんと当てはめて紹介しているというのが、大英博物館らしいところだなと思っています。

英国で気づいたこと

こういった日本のイメージというのを海外で経験する中で、日本の代表として、きちんと日本のことを勉強して、正しい知識をもって、海外の人たちに伝えていきたいという思いが芽生えてきたように思います。海外で長く生活しておりますと、日本に関するたくさんの質問をされます。政治、経済、歴史、文学など、日本のことだったらすべて「アキコに聞け」ということになります。

日本にいたときには「それは専門外なので分かりません」と言えたことが、海外にいと、自分の国のことなのになぜ分からないのかと言われてしまいます。そこで私は、自分が日本についていかに知らなかったかということの思い知らされました。そして、日本という国についてきちんと知り、伝えていきたいと思うようになりました。

それまではスコットランド史を専攻していたのですが、大学を卒業してからは、日本美術に専攻を変え、海外の美術館、博物館の日本美術コレクションを研究対象として、19世紀から20世紀の海外における日本美術観をテーマに博士論文を書きました。博士課程在籍中の5年間は大英博物館にボランティアとして勤務させていただきました。留学中、オックスフォードにいた時間を除けば、日本セクションのオフィスにいた時間が一番長かったのでは

ないかと思うぐらいです。

大英博物館には一年を通してたくさんの方が日本から調査に来られます。その中には、以前は学会で遠くからお見受けしていた著名な先生、なかなかお目にかかる機会のない有名作家さん、文化系の財団の役員の方から官庁の方まで、いろいろな立場、職業の方がおられます。

日本美術に関連する第一線で活躍される方々とお食事をご一緒させていただいたり、調査に同室させていただいたりなどして、毎日が貴重な経験と勉強の日々でした。ただ自分の研究に没頭しているだけでは気付かなかったであろう多くのことを、大英博物館にいたおかげで、いろいろと知ることができました。大英博物館に来られる方々の訪問の理由はそれぞれ異なりますが、その多くは日本関係のコレクション、つまり日本の文化財を見に来られます。

文化財の保存

お目にかかったさまざまな分野の方々に、文化財の保存について伺ってみると、そこには、文化財は守っていかなければならない、伝統的な文化は続けていかなければならないという共通の意識がありました。でも、それぞれの分野での危機感は、それぞれの組織の中で解決方法を見いだそうとしているが限界があること、そして、異業種・異分野間では問題が共有される機会が少なく、どのようにこの問題を展開させていったらよいか分からないという状況にあることが分かりました。

にもかかわらず、時代の流れだからしかたないという諦めや、言い方が少し悪いかもかもしれませんが、それぞれがそれぞれに他人、特に行政に責任を転嫁しているという状況があるように感じました。留学生活を終えて帰国し、京都の立命館大学に勤務するようになってから、その思いは強くなりました。京都を中心として活動されるさまざまな作家さんや職人さんとお目にかかり、お話をうかがわせていただく機会が増えましたが、そこで皆さんが口をそろえておっしゃるのが、このままでは日本の伝統的な文化は残っていかないという切実な思いでした。文化というのは、需要と供給で成り立っているものです。でも今、その需要と供給のバランスが崩れてしまっています。

例えば、日本にはすばらしい竹工芸の技術がありますが、竹工芸品の素材としての竹は、ざるや籠といった生活雑器に用いられることが多く、古来より生活に密着してきた素材であるためか、竹なのにこんなに高額なのかと思われる日本人がたくさんいます。すばらしい日本文化が残っているのに、それを受け入れる層の理解が得られないために、失われつつある伝統文化が数多く存在するのです。

それを防ぐためには、これは大切な文化だから守ってくださいと押しつけるのではなく、日本人一人一人がこれは大切な文化だから守っていきましょうと思ったださるように、われわれは今、日本文化のすばらしさを一人でも多くの方たちに知っていただき、日本文化が生き続けるための環境を作る努力をしなければいけないと思うようになりました。

文化財保護法の対象となる建造物、絵画、彫刻類、史跡や庭園といった形のある文化財。演劇や工芸技術を保持する人々を指す、形のない文化財だけを保護するだけでは、文化は残っていきません。浮世絵をはじめとする絵画や版画、陶磁器、漆器、根付けなどは、もともとは日本人の生活の中にあり、実際に使われていたものです。でも、それがガラスケースの中に入り、鑑賞するものになってしまったおかげで、急激に生活の中から離れてしまった気がします。

せっかくのすてきな作家ものの器も、もったいないとしまいこまれてしまいます。掛け軸を飾れる床の間がある家も少なくなりました。もちろんそれが悪いと言っているわけではありませんが、もう少し日本文化は気軽に楽しめるものだと私は思います。文化財保護法というのは、残すべきものを誰かが選んで保護するというシステムです。国宝とか重要文化財というものは、お国が、これは大切ですよと、われわれに示してくれる指標であるわけですが、なぜそれが大切なのかという理由が、いまひとつ説明がなされていないように思います。なぜこれが大切なのかということのをわれわれが分からなければ、それを守ろうという気にはなりません。なので、そうやって、守らなくてはいけませんよ、守ってくださいと言われなくても、これは大切だから守っていきましょうと、われわれ自身が自主的に思うような環境づくりというのをしていかなければならないのではないかなと思うようになりました。

わざの美展

留学中、大英博物館で、ある展覧会がありました。2007年に開催された *Crafting Beauty in Modern Japan*、「わざの美」と訳されていた展覧会です。

わざの美展は日本工芸会の主催する日本伝統工芸展をもとにした展覧会で、会期中多くの人間国宝の先生方の作品や、その先生方のデモンストレーションなどがありました。海外で工芸というと、茶道具のようなものを中心に理解されている方たちが多かったのですが、茶道具ばかりでない、さまざまな日本陶磁器の側面や、日常生活の中で使える美術品としての日本工芸を訪れた人々の意識を大きく変えたようです。

漆芸、竹芸、^{きりかね}截金の人間国宝の先生方によるワークショップや、関連して、別会場では、生け花の展示も行われ、毎回会場は大入り満員となっていました。彼らの興味を引き付けた

のは、これらの展示品がすべて「使える」ということです。西洋では、美術館で鑑賞される美術品といえば、絵画や彫刻です。陶磁器や織物、木製品など、日常生活の中で使うものはクラフトであり、アートよりは一段下に見られがちです。でも、こういった美しい、使える作品を作る人が人間国宝となって保護され、その作品を現代人が実際に使うことができるということに、海外の方たちは大きな衝撃を受けていました。

文化というものは生活の中に息づいてこそ文化といえるところだと思います。私は着物を1か月に1~2度は着る習慣がありますが、今は着物を全く着ないとか、よほど特別なお祝いなどでないかぎり着ないという日本人がたくさんいます。親が着物を着ないので子どもも着物を着なくなりますし、親が和菓子を食わなければ子どもも和菓子を食わなくなります。文化は人々の生活とともに生き、変化し続けるものであり、その動きが止まった時点で形式化し死んでしまいます。現代社会の生活の中に取り入れ、生かしていかなければ、日本文化は次々と過去の遺物になってしまいます。

心游舎の活動

それを防ぐために、今、私たちは何ができるでしょうか。その答えとして生まれたのが心游舎という団体です。心游舎は日本の未来を担う子どもたちに、本物の日本文化に触れる機会を提供し、生活の中に取り入れるきっかけを提供するさまざまなワークショップを神社やお寺で開催しています。

かつて日本の神社やお寺は、多くの文化人が集い、さまざまな文化の発信拠点であった場所でした。今では冠婚葬祭や観光でしか行かないような非日常の場になってしまっています。その神社やお寺を、子どもたちがもっと気軽に集まり、共同体で育児ができる場所に戻すというのが、心游舎の目的の一つです。心游舎の活動の中心は、子どもたちが生きた日本文化をみずから体験することのできるワークショップの主催です。

祭り、伝統芸能、工芸など、日本文化の本当のよさや魅力は、鑑賞することではなく、体験・体感することによって伝わるものだと思うからです。では、ここ最近開催しましたいくつかのワークショップをご紹介します。

こちらは竈門神社という、太宰府天満宮のちょっと奥にある、お山の神様をおまつりした神社なのですが、こちらで「神様からのおくりもの」と題しまして、かまどでごはんを炊いてみんなで食べるというワークショップを企画いたしました。有田の陶芸家の辻さんにいらしていただきまして、実際に福岡で採れたお米を福岡のお水で炊いて、福岡ではありませんけども九州の器でみんなでいただくというワークショップでした。

やはり地産地消といいますか、その土地で採れたものを、その土地のお水で炊いて、その土地の器でいただくというのが一番のぜいたくであり、それが一番栄養もあって、理にかなっていると思います。神様の火を使って、お釜でごはんを炊かせていただき、みんなでそのお供えのお下がりいただくという形でワークショップを行いました。

梅干しだけというすごく素朴なおかずしかなかったのですが、1升以上炊いたご飯は、あっという間に空になりまして、子どもたちが、終わったあとに、このお米を持って帰りたいと言って、配給のようにお米の袋の前に列をなして並んでくれたのは、われわれもうれしいことでした。

また、東北で東日本大震災の復興支援のために3県を回らせていただいて、毎年、ワークショップをさせていただいております。今年は陸前高田の今泉天満宮の中にある図書館でふくら布ぞうり作りのワークショップを行いました。

現地の被災された方たちが、何か夢中になれることをしたい、と被災地で暮らされる中で手仕事で始められた布ぞうり作りを、みんなで経験させていただきまして、思いを込めるということの大切さをみんなでもらいました。

また、子どもたちに伝えていくことももちろんなのですが、大人向けのイベントも開催させていただいております。

いくら子どもたちが日本文化に触れたいと、歌舞伎を見たいとか、漆の器でごはんを食べたいと言っても、親御さんたちが、そんなのもったいないとか高すぎるとか言ってしまうようでは、せっかくの子どもたちの興味の芽が摘まれてしまうことになりますので、大人に向けても同じように理解していただけるように、講演会やワークショップなどを企画しております。では、ここで、この活動の内容をまとめたDVDがありますので、少しご覧いただきたいと思います。

(映像)

伝統／伝燈

ありがとうございました。ご覧いただいておりますお分かりになったかなと思うのですが、子どもたちが本当に楽しそうに参加してくれています。毎回、ワークショップが終わると、楽しかった、また来たい、次は何するの？ などと声をかけてくれます。楽しかった思い出は記憶に残ります。

今は、それが何だったのか分からなくても、5年後、10年後に、その記憶の種が芽を出して、ごはんをおくどさんで炊いたなとか、あのワークショップを通して、白米食べなかった

けど食べるようになったとか、そんなことを思い出してくれたらいいなと思っています。

その楽しかった思い出を大切にすることが、日本文化を大切にすることへとつながっています。いつ芽が出るか、もしかしたら一生芽を出さない種かもしれませんが、未来の日本のために、この記憶の種を子どもたちの心にまく作業を、心游舎の活動を通して続けていきたいと思っています。

皆様、よくご存じの「伝統」ということばがあります。この伝統の統という字は、代々受け継がれて一つになっているという意味で、「血統」ということばに使用しており、一本の線という意味です。もともとは、この伝統ということば、ともし火を伝えるという意味の「伝燈」であったといわれています。

この伝燈というのは、比叡山延暦寺に不滅の法灯というのがあります。今まで一度も絶やされることなく、ずっと灯し続けられてきた、この不滅の法灯ですが、お坊さんの世界で、師匠から弟子にともし火を伝えていくことが伝燈と言われます。この不滅の法灯を伝えるように、ともし火を脈々と伝えていくことが伝燈というふうにいわれています。

このともし火を伝えていき続けることで、それが一本の線になって、伝統、右のほう（伝燈）の伝統になるということです。油断大敵ということばがありますけども、これは、この不滅の法灯を絶やさずに、ずっと守っていくために、油を絶やしてはいけませんという意味です。

明らけく 後の仏の御世までも 光りつたへよ 法のともしび、というお歌があります。このように、今、伝統というものが失われてしまうことがたくさんあります。簡単なほうへ、便利なほうへと、どんどん流れていってしまうような今の世の中ですけれども、その伝えられてきたものにどんな意味があるのかというのを、いま一歩立ち止まって考えてみるということが必要なのではないかなというふうに思っております。

師匠から弟子にともし火を伝えていくように、われわれもたくさんの方たちに、日本文化のともし火を伝えていきたいなというふうに思っております。本日は長時間にわたりまして、ご清聴ありがとうございました。